様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　　24 年　6 月　1 日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：21520746
研究課題名（和文）20 世紀におけるアメリカの多元的国民統合と人種境界の形成

研究課題名（英文）Pluralistic National Integration and the Formation of Racial Boundaries in the Twentieth Century United States

研究代表者
中野　耕太郎（NAKANO KOTARO）
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：00264789

研究成果の概要（和文）：本研究は、第一次大戦期から 1920 年代にかけて成立し、1960 年代まで存続した 20 世紀アメリカの国民秩序の形成過程を考察した。戦時の国民動員政策と戦後に噴出した人種間暴力を詳細に分析し、またこれと深く関わったリベラルな知識人の社会秩序観の変容を検証することで、新来の南・東欧移民を積極的に国民化しつつ、黒人やアジア系を人種的他者として分離する構造をもった国民編成の歴史的な性格を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study examined the formation of the national order in the twentieth century America which was established in the days of World War I and its aftermath. To explore this historical process, I analyzed the wartime governmental mobilizations and a series of postwar racial conflicts. Furthermore, I surveyed the discourse on socio-political orders by contemporary American intellectuals. Through these researches, I elucidated the historical significances of this national formation which integrated recent European Immigrants as a part of American nation and segregated African Americans and Asian Americans as racial others.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：南北アメリカ史、ナショナリズム、人種、移民、暴力

１．研究開始当初の背景

研究代表者、中野はこれまでに、アメリカ合衆国のナショナリズムを主に移民の同化統合政策（アメリカ化）の観点から考察してきた。特に、20 世紀初頭の対移民政策と第一次大戦の関係に注目した分析は、３編の論文―（１）「新移民とホワイトネス ――20 世紀初頭の『人種』と『カラー』」（川島正樹編『アメリカニズムと「人種」』名古屋大学出版会、2005 年所収）、（２）「祖国ナショナリズムと

アメリカ愛国　―シカゴのポーランド移民」（樋口映美、中條献編『歴史のなかの「アメリカ」――国民化をめぐる語りと創造』彩流社、2006 所収）、（３）「戦争とアメリカ化――第一次世界大戦と多元的国民国家統合」（上杉忍、巽孝之編『アメリカの文明と自画像』ミネルヴァ書房、2006 年所収）として刊行された。ここで明らかになったことは、第一次大戦期のアメリカ政府の政策が、必ずしも新来の南・東欧移民のエスニックな帰属を否定するものではなく、移民集団の自律性を一定程度容認しつつ効率的な統治を目指したことだった。また、移民の側も自律的なエスニック生活を保持しつつ、白人としての共同性を享受するようになり、多元主義的な国民統合に包摂されていったことがわかった。しかしこの研究の過程で、同時期に北部都市へ移住した黒人やアジア系移民と、この国民形成がいかに関わるかという新たな問題関心が生じた。多くのケースで、ヨーロッパ移民の同化問題が黒人やアジア系の社会的処遇や「同化能力」の言説と対比する形で現れていたからである。南東欧移民を「アメリカ人」として包摂した国民再編の過程で、非白人はどのような役割を果たしたのか、換言すれば、この 20 世紀アメリカ・ナショナリズムにおいて、黒人やアジア人を他者化する人種境界はいかに機能したのか、という本研究につながる検討課題を得るにいたった。

２．研究の目的

20 世紀への転換期以降、アメリカ社会は、急激な産業化に伴う大規模な国内・国際の労働力移動を背景として新たな国民的秩序の再編を迫られていた。政治経済の中枢たる北部の大都市では南・東欧やアジアからの新移民と南部出身の黒人移住者が、拡大する格差社会の底辺を構成する階層として孤立したため、同時代の知識人や政治指導者はこうした人種・民族的マイノリティーの存在を踏まえた新たな国民統合の道を模索せねばならなかった。

この国民再編成をめぐる混沌は、第一次大戦期の国家総動員政策を一つの契機とし、また戦後に噴出する社会紛争とその調停を経て、安定的秩序を得るに至った。それは、南・東欧移民については一定の文化的多様性を承認しつつ国民共同体内に包摂し、他方、黒人やアジア系はこれを「人種」的他者として市民社会の外部に排除する構造であった。この 1920 年代中葉までに確立する国民秩序は、法制度の面では 1960 年代の公民権法と移民法改正までの長期にわたって存続し、さらに今日の新自由主義的な社会潮流の中で形を変えて遍在する人種主義を支える背景となっている。

歴史研究の中にも、アメリカニズムと人種境界の関係を問い直そうとする業績が一定程度蓄積されてきた。例えば Michael Lind, *The Next American Nation*(1995)は、アメリカ国民共同体が 19 世紀後半に、伝統的なアングロ・アメリカからドイツ系やアイルランド系のカトリックなどをも包含したユーロ・アメリカへ変容し、その体制が 1950 年代まで続いたと論じた。しかし、先行研究の多くは内的他者の創出を、総じて文化や人種表象、あるいはアイデンティティーの問題として扱う傾向があり、権力政治の側面への関心は相対的に低い。

これに対して本研究は、むしろ制度や暴力（強制）の側面に注目して、国民再編の問題を考えた。特に民間社会における暴力や境界形成と公権力による動員、秩序構築の契機、そしてその両方に密接に関わるエリート・知識人の思想を検証し、ひとつの政治的、社会的「秩序」としての 20 世紀アメリカの形成

を考察した。

３．研究の方法

本研究は、20 世紀国民秩序を分析する際に具体的に３つのアプローチから検討を進めた。（１）第一次大戦下の戦時政府による黒人の動員政策――特に陸軍における黒人兵士の処遇問題を考察した。具体的には、アメリカ国立公文書館が所蔵する陸軍参謀本部の史料や訓練キャンプの広報紙を収集・分析した。（２）シカゴ暴動を事例研究として、戦後の北部に頻発した人種暴動とその公権力による調停プロセスを考察した。特に、戦後暴動の調査機関であるシカゴ人種関係員会の内部資料の分析を重点的に行った。（３）戦争動員や暴動後の平和維持を含む広義の「暴力」との関連で、同時代のセツルメント・ワーカーや学識者の社会秩序観を検討した。シカゴを中心に有力な慈善活動家や社会学者等の個人文書の分析を行った。

研究の進め方としては、戦後の人種暴動とこれを取り巻く社会言説の分析からまず着手し、時期的には遡及的な形で先行する戦時体制の調査へと展開していった。もとより、20 年代中葉に完成する国民再編は、第一次大戦期の国家動員政策の影響を強く受けたことが想定されたが、戦時政策そのものが管掌した政治、社会領域は極めて多岐に及ぶ。したがって、戦後政治の展開の中で顕在化する新しい国民秩序をめぐる諸問題をあらかじめ検出し、それらが第一次大戦期にいかに醸成されていったかを検証することとした。

なお、各段階の調査、研究はシカゴ市における実地での文献調査に基づくケーススタディーと全国的、国際的な政治史、社会思想史の研究の両面から実施した。北部社会への人種隔離制度の拡大を論点の一つとした本研究では、地域の政治・社会構造をミクロな視点から観察することが不可欠であった。

４．研究成果

（１）2009 年度は、第一次大戦直後のシカゴで勃発した人種暴動の展開と、暴動後に設置されたシカゴ人種関係委員会による調停活動を綿密に検証した。まず年度前半には、同委員会最終報告書などの既刊行の史料を中心に研究を進め、その成果の一部は第 59 回日本西洋史学会小シンポジウム『20 世紀世界に見る人の移動と暴力』でのパネル報告、「人種暴動とその後―シカゴ人種関係委員会（1919～21 年）の秩序形成」として発表した。また、イリノイ州スプリングフィールドの州文書館でシカゴ人種関係委員会文書を閲覧し、シカゴ大学では人種関係委員会の創設に深く関わった慈善家、Julius Rosenwald の文書調査を行った。同委員会の論理と行動において、実のところ人種関係の公平な是正よりも、平和維持が優先され、そのため同勧告は暴動によって創られた新しい構造（居住区の隔離）を容認・固定化する効果を持った点を明らかにした。これらの研究成果は、「20 世紀国民秩序と人種の暴力―1919 年シカゴ人種暴動の検討」（『歴史科学』2010 年 4 月）として出版した。

（２）上の人種暴動に関する、調査の過程で、暴動後の調停・和解を主導した都市社会学（シカゴ学派）の重要性が浮かび上がってきた。移民の同化・適応理論として知られるその学知は、暴力の再発を抑え、調和的な人種・エスニック関係を模索したが、それを実現する技術のひとつとして「分離」の論理を包含するものでもあった。このように、事実上の境界形成を統合の不可欠の要素とみる傾向は、専門的な学識者に留まらず、広く 20 世紀転換期のリベラルな社会活動家の間にも当てはまることがわかった、この考察は、

当時の移民と黒人の投票権縮小現象を扱った、「浄化される民主主義―『人民』から国民へ」（共編著『アメリカ合衆国の形成と政治文化』(2010 年) 所収）として出版された。

（３）2010 年度は、第一次大戦期の国民動員を人種境界の観点から検証する作業を進展させることができた。成果の一端として、京都大学人文研主催のシンポジウムで「アメリカ化の戦争」なる試論を発表した。ウッドロー・ウィルソン政権の戦争政策の根本を国内・国際のアメリカ化運動と捉え、その施策の中に統合と排除の複雑なメカニズムが働いていたことを明らかにした。さらに、この検討をより実証的に進めるべく、ワシントン DC で実地の史料調査を行った。具体的には、議会図書館と国立公文書館で、外国人兵士と黒人兵士の処遇を示す訓練基地関連資料や陸軍参謀本部の記録を閲覧した。これらの史料の分析をとおして、第一次大戦の経験と戦後の人種境界形成をつなぐ経緯、事象が一定程度明らかになった。

とりわけ戦時下に、徴兵を通じて民間社会の人種偏見が軍隊内部に浸透したこと、そして、一旦国家機関に受容されたカラーラインが、今度はさらに強固なかたちで民間社会に還元されていったこと。そうした再帰的プロセスの中で人種境界がこの時期のアメリカに定着していった事実が明らかとなった。

（４）最終年度の 2011 年度は、これまでの調査、研究を総合する目的から、20 世紀初頭の社会福祉、労働問題の専門家や、軍の政策立案者、黒人の市民権運動家など多様な知識人に注目し、いかに彼らの思想と行動が人種隔離と多元主義を属性とする新しい国民秩序の構築に関わったかを明らかにした。その成果の一部は論文、“How the Other Half Was Made: Perceptions of Poverty in Progressive Era Chicago” (*Japanese Journal of American Studies* 第 22 号)、「衝撃都市からゾーン都市へ―20 世紀シカゴの都市改革再考」(『史林』第 95 巻 第 1 号) として出版した。

（５）また同年度には、これまでの戦争と人種問題に関する検討を補完し、さらに進める作業を行った。ワシントン DC の国立公文書館で特に黒人兵士に関する陸軍の史料を渉猟するとともに、議会図書館では、当時の黒人メディアの言説を集中的に検討した。

そこから確認されたことは、第一次大戦期の黒人エリートの多くが「世界の民主化」というアメリカの戦争目的と反人種主義という自己の目標を重ね合わせて理解していた一方で、アメリカ国家の側では、黒人を潜在的な反乱分子と見る傾向が根強く、むしろ治安上の観点から監視の対象となっていたことであった。この研究成果は、前年度の研究で抽出した国家・社会間に再帰的に増幅される人種問題の事例とあわせて、京都大学人文研主催の研究会で報告した（「クルーシブル（坩堝）―第一次世界大戦とアメリカニズム―」2012 年 2 月)。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①<u>中野耕太郎</u>　「衝撃都市からゾーン都市へ―20 世紀シカゴの都市改革再考」『史林』第 95 巻 第 1 号 (2012 年 1 月)、209-246 頁、査読有

②<u>中野耕太郎</u>　“How the Other Half Was Made: Perceptions of Poverty in Progressive Era Chicago” *Japanese Journal of American Studies,* 22 (June, 2011), pp. 63-87、査読有

③中野耕太郎 「研究フォーラム：アメリカにおける移民史研究の現在―東欧移民史の可能性」『歴史と地理　世界史の研究』第 226 号（2011 年 2 月）56-59 頁、査読なし

④中野耕太郎 「20 世紀国民秩序と人種の暴力―1919 年シカゴ人種暴動の検討」、『歴史科学』第 200 号（2010 年 4 月）、52-70 頁、査読なし

〔学会発表〕（計６件）
①中野耕太郎 「クルーシブル（坩堝）――第一次世界大戦とアメリカニズム」、京都大学人文科学研究所「第一次世界大戦の総合的研究」研究会（2012 年 2 月 11 日 京都大学）

②中野耕太郎 「アメリカ革新主義の貧困観と近代市民の形成―統合の中の分断」、「近代市民規範のポリティックス―「社会改良」の複合的メカニズムに関する史的考察」定例研究会（2011 年 9 月 23 日、専修大学）

③中野耕太郎 “’Discovery of Poverty’ and Divided Nationhood in Early Twentieth Century America,” Univ. of North Carolina Workshop, “Making Modern Citizens: Politics, Cultures and Struggles for Social Reform” （2011 年 9 月 10 日、ノースカロライナ大学・チャペルヒル校）

④中野耕太郎 「アメリカナイゼーションの戦争」、京都大学人文科学研究所「第一次世界大戦の総合的研究」、ミニシンポジウム：第一次世界大戦研究の焦点をどこに定めるのか ―― 「世界性」と「総体性」そして「現代」の問題性について ―― （2010 年 12 月 25 日、京都大学）

⑤中野耕太郎「浄化される民主主義」、社会的なものの思想史研究会（2010 年 3 月 13 日、同志社大学）

⑥中野耕太郎 「人種暴動とその後―シカゴ人種関係委員会（1919～1921 年）の秩序形成」第 59 回日本西洋史学会小シンポジウム III『20 世紀世界にみる人の移動と暴力』（2009 年 6 月 14 日、専修大学）

〔図書〕（計３件）
①中野耕太郎 他 『大学で学ぶ 西洋史［近現代］』、（小山哲、上垣豊、山田史郎、杉本淑彦編著）ミネルヴァ書房、2011 年、240-245 頁、245-246 頁

②中野耕太郎、常松洋、肥後本芳男編、『アメリカ合衆国の形成と政治文化―建国から第一次世界大戦まで』、昭和堂、2010 年、104-105 頁、154-179 頁

③中野耕太郎 他、『アメリカ史研究入門』（有賀夏紀、紀平英作、油井大三郎編）山川出版社、2009 年、88-112 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
中野　耕太郎（NAKANO KOTARO）
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：00264789

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし